研究紀要　第9号　327－336頁　2001年3月
㈶とちぎ生涯学習文化財団　埋蔵文化財センター

考古学の成果を教材化するにあたって
―考古学と「問題生徒」―

斎藤（さいとう）　弘（ひろし）

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　学校教育でとりあげられる考古学の成果
Ⅲ　考古学と「問題生徒」
Ⅳ　変革期にある学校で
Ⅴ　考古学の成果を教材化する意味
Ⅵ　おわりに

現在、深刻化する教育問題に対して、早急な改革の必要性が国民的規模で論じられている。一方成熟期を迎えている日本考古学は、膨大な蓄積を教育現場にどのように還元するかについて、近年高い関心を持つようになった。この方法論の研究も大きな課題であろう。また考古学研究者や文化財担当者も、教育現場の問題点を認識する必要があるだろう。

本稿では、現状の教育問題について筆者なりに総括した上で、これまでの学校教育での考古学の扱われ方、考古学に内在する可能性について論じるつもりである。考古学には、個人の体験に根ざすところの判断や、個別事象の説明を大切にするという性質がある。このことは誰もが参加できるという開放性に通じている。一方では生活文化史上の根本問題への遡上という可能性をもっている。問題点を見いだしてこれを解決していこうという学習活動のプログラムが模索されている現状で、考古学は大きな役割を果たすことができるだろう。いささか抽象的ではあるが、考古学の成果及びその考え方と教育の今後の方向性の係わりについて、本稿が多少でも示唆するところばあれば幸いである。

Ⅰ　はじめに

筆者は、平成3年度から平成7年度まで㈶栃木県文化振興事業団[1]埋蔵文化財センターに勤務し、平成8年度からは栃木県立佐野高等学校定時制課程で教員生活を送り、今日に至っている。

5年間の空白を経て学校現場に戻ってみて、学校のあり方が少し変わろうとしていることに気が付いた。そしてその後の5年間。生徒に目を向ければ、不登校やいじめなどこれまでの教育観では対応できない生徒が激増した。行政的にも、学校週5日制や新課程の導入が間近に迫っている。「教育改革」と言えば十把一からげの感もあるが、現在まさにその渦中にいることは確かである。また、最近では少年犯罪が話題になっている。個々の状況は多様であるものの、おしなべてこれまでの「動機」の類型では説明のつかないものばかりあると言えるだろう。

一方では考古学の側からも、膨大な発掘と考古学の成果をどのように教育の場に還元したらよいかについて真剣な取り組みがなされるようになった。この方面については、まさに緒に付いたばかりである。考古資料の教材化といえば、「○○式土器をどのように説明するか」といった方法論も大切だし、学校での教育活動のさまざまな場面でどのように考古学の成果を活用するか、アイデア集のようなものの刊行も望まれる。また実際に取り組んでいる多くの実践例も存在する。

本稿ではいささか抽象的ではあるが、考古学の成果及びその考え方と、教育の今後の方向性の係わりについて私見を述べるつもりである。前述のような具体的な実践に先立って、あえてこうした観点を取り上げるのは、情報発信の側の考古学研究者や文化財担当者に、教育現場の問題点を認識してほしいからである。この点の議論が不十分では、大きな貢献となるはずが、方向違いの介入に終わってしまう恐れもあるからである。

そしてまた、こうした観点からの議論は、考古学にとっても新しい研究視点の一つのアイデアとなる可能性もあるだろう。

Ⅱ　学校教育でとりあげられる考古学の成果

筆者が勤務していた当時、埋蔵文化財センターでは教員籍の派遣職員が「ほかほかの会」と称して集まり交流を深めるようになった。そのころは、親ぼくを深める行事の外、石器作りや土器作りの体験学習、教科書を持ち寄り考古学の扱われ方を見て意見を交換するなどの活動も行った。筆者の感想では、小中学校の先生方と交流できたことはとても良い機会だったし[(2)]、体験学習も面白かった。教科書では、小学校の明るく楽しい取り上げ方に目を見張ったものの、古代以降一部コラムを除きまったく考古学が使われなくなる実情に驚いた。このころから生徒の歴史への興味は薄れていくという声もあった。「教科書には弥生土器に縄文はないと書いてある」と呆れる人もいた。高校の教科書はとても地味に感じられた。本稿ではその余裕はないが、考古学の成果が教科書にどのように活かされ、またどんな点が活かされていないか検討する必要もあるだろう。

歴史以外の教科でも考古学の成果は部分的に使われているし、使える可能性はあると思う。国語では古典に登場する品々に、例えば烏帽子など考古学で扱われているものも多いように思える。政治経済や現代社会で貨幣経済のしくみを勉強する時も、前近代の社会と比較させると分かり易いだろう。流通は考古学が得意とする分野だと思う。物理でも摩擦熱と発火具のことが教科書にみえる。筆者の勤務校でも火きり臼を借りてきた。それができる子はできるのだ。その子だけはたちどころに炎をあげることができた。個としての人間の能力を改めて評価すべきであって、前近代の諸技術は誰もができるようにとは必ずしも考えていないのではないかと

感想を持った。さらに家庭科では、衣食住全般にわたって生活文化が取り上げられ、遺跡や出土品、絵巻物などの写真も掲載されている。その上、新教育課程では後述するが「総合的な学習の時間」というのもある。考古学の成果の利用は、アイデアによっては無限に近い可能性を持っているかもしれない。

一方で、入試問題に登場する考古学についても知っておく必要があるだろう。難易度の高い大学を想定にした日本史Ｂの参考書。ここにもたくさんの考古学の成果が登場する。最近マスコミで話題となった遺跡名を答えさせる問題が多い。関心のある生徒にとって有利かもしれない。しかし、その他多くの受験生にはどうだろうか。新発見の遺跡が話題となり、受験生の関心を試そうと入試に出題され、これを踏まえて受験参考書にも登場する。その結果、受験生の負担も増えるし授業でも取り上げざるを得なくなる。こんな悪循環に陥っているようにも思える。量の多さによる苦痛の中で生徒は心を閉ざし関心を失い、暗記にだけ精を出すといういわゆる歴史離れは加速するだろう。豊富な一次資料を保有する考古学は、彼ら彼女らのどろんと眠ってしまった知的好奇心を、再び覚醒させることができるだろうか。

Ⅲ　考古学と「問題生徒」

次に、考古学が内包する性格と教育問題について私見を述べたい。そこで最初に、異なる分野でありながら趣旨のよく似た発言があるので紹介したい。

第一は、中世史の網野善彦氏の発言である。

「…そのころ考古学者は、自分たちの掘っていることに、文献史学の側は何も答えてくれないという印象を強く持っていたようです。」

「そのころの文献史学が生活そのものをとらえていないことは、考古学者が強く感じたようです。『これは何ですか』と、具体的に発掘されたものを突き付けても一向に歴史家が答えられないわけです。」

（網野善彦　1997　インタビュー「資本主義の考古学」『大航海』No.14　新書館　傍点筆者）

第二に、臨床心理学の河合隼雄氏の発言である。

「あるいは中学生なんかに、こういう子がおると思いませんか。例えば『放っといてくれ』と言うから放っておいたら『ばかやろう』と怒るし、構いにいくと『構うな』と怒るし、これは一体どうなっとるんやと思いますが、向うが悪いと思ったら大間違いで、向うはそういう公案をわれわれにくれているわけですね。公案というのが悪かったら、問題を提出しているわけです。だから私はそういう子を問題児と言うんだと思います（笑）。つまり、問題を先生にくれるのが問題児なんです。」

（河合隼雄　1985『カウンセリングを語る』下　創元社）

両者の発言から、ある時期の中世考古学者と「問題生徒」とは、相似形的に共通点があると言えるのかもしれない。つまり、問題生徒とは問題を突き付ける生徒であり、当時の中世考古学者は問題を持ってくる研究者だったのである。中世考古学に限定する必要はない。なぜなら当時は大学で中世考古学を卒論でやりましたという人はほとんどいなかったからである。両者の共通点、それは「認めてほしい、受け入れてほしい気持ち」なのではないだろうか。発掘を担当した人は、自分の遺跡と自分が発掘した事実を大切に思う。そんな気持ちが網野氏らの文献史学者へのそうした言い方になる。権威や肩書きではない、全存在をかけた根本的な答えを期待しているのだと言えるだろう。

この共通点はどんな切り口として利用できるだろうか。考古学の側に、根本的な答えを求める研究姿勢がなくならない限り、それは大いに期待できるのではないだろうか。

Ⅳ　変革期にある学校で

(1)　現代の生徒像

考古学の仕事に携わる方々も、現代の学校及び生徒像について、いろいろな機会に情報を得ておられると思う。それは「学級崩壊」や「いじめ」そして「不登校」といった言葉からくるイメージで、これまでの方法では対応できなくなった生徒であり、変革期にある学校という認識であろう。まさにそのとおりであると思う。生徒達は未だに堅牢な受験体制のもとにあり、色々な面で年齢不相応な束縛と統制を受けている。自分の考えで行動し結果に対して責任を負う練習の場は極めて少ない。一方で家族の空洞化が深刻となり、家庭や職場など社会全体が学校的な管理と評価の罠に陥っている。

また現代の若年層はさまざまな心の問題を抱えている。あえて類型的に表現すれば、心に若干のトラウマを持ち、自分の居場所が見つからず、他人とはハリネズミのジレンマに悩み、自分に自信を持てないアダルト・チルドレン。深刻な注意欠陥多動性障害（ＡＤＨＤ）に苦しむ人もいる。今や学校は心理学用語に溢れている感がする。これらはまさに現代の学校（大人）が与えられた宿題であると言えるだろう。迫られる解答。根本的な答え以外は受け付けてもらえないだろう。出題者である生徒は毎日学校へ来るのである。

(2)　高等教育の大衆化

大学関係者の間では、大学生の学力の低下を危惧する声がある。高等教育の大衆化の現実ではやむを得ない面もあるだろう。しかし文部省が進めてきた「ゆとり」、具体的には教育内容の精選に原因を求める意見も根強い。

しかし、今の高校生は本当に勉強しなくなったのだろうか。二極化していると考えている教員は多い。いわゆる進学校の生徒に課せられる宿題の量は大変なものだ。受験産業もこの景気

の下ですら活況を呈している。しかしこういう事実もある。生徒達は卒業時教科書類を大量に処分するようだ。定期試験の後も答え合わせが終わると、問題用紙答案用紙はまるめてゴミ箱へ捨てるという。大きな苦労が終わってほっとしたというのが実感なのであろう。勉強は将来のための準備であり、苦労を乗り越えればそこそこの安定と幸福が約束されるのである。勉強そのものには何の価値も見いだせないし、そんなことを考えて時間をとるのはそれこそ「勉強にとって有害」なのである。

一方でいわゆる底辺校では、「勉強は将来のための準備」と言っても生徒は誰も信じてくれない。受験学習の亜流、そもそも興味を引くものでもないし、そんなもので身についた知識が、社会でどのような役に立ち誰が評価してくれるか。誰が考えても答えは明白だろう。

大学生の学力の低下を、モチベーションの低下に原因を求める意見がある。合格率向上のみを考えて受験指導してきた高校側。学力試験の結果のみを重視し、入学後は適当に遊ばせてきた大学側。その双方に責任はあるように思われる。

(3) 「成熟社会」への対応

わが国の青少年は、苦しい受験勉強を乗り越えればそこそこの安定と幸福が、これまでは約束されてきた。しかし近年の社会経済の状況は、この基本的な約束すら反故にしてしまいそうな情勢にある。実力主義、能力給の採用、終身雇用制の崩壊、人材引き抜きの日常化など、労働市場の流動化が進んでいる。スクラップ＆ビルドの時代、大企業に就職できたと言っても安心はできないだろう。生徒は敏感に感じている。不安定ながらフリーターでも食べていけるし、正式採用の会社員は雇用機会もメリットも減っている。「そんなことではいい就職はできない」と言ってみても、実態は空しいのである[(3)]。

社会学者の宮台真司氏は、講演会の発言で次のように指摘した。

「労働市場の流動性が促進されると、いわゆる組織に属して忠誠心を誓うというメンタリティーよりも、どこに属しても自分のポテンシャリティーを発揮してくるタイプが求められる…」

「『何が自分にとって幸いなことか』、『何が自分にとって楽しきことなのか』を自ら試行錯誤で選びとっていけるかが重要になるわけです。」

彼はこうした能力が求められる時代の教育は、目標が次のように変化すると断言した。

「一斉カリキュラムから個人カリキュラムへの移行、年齢別の発達課題よりも個人の目的と手段の優先、協調性重視型から試行錯誤型へ、共同体的同調支援型から自己決定支援型へと教育の目標が激変することになります。」

（宮台真司　1999　日高教第46次全国教育研究集会記念講演から）

(4)　新学習指導要領（高校の例）

さて、こうした状況の下で間もなく新学習指導要領が施行されるわけだが、それに先立つ教育課程審議会の答申では、次のように改革の方向性を示している。

「高等学校においては、義務教育の基礎の上に立って、自らの在り方生き方を考えさせ、将来の進路を選択する能力や態度を育成するとともに、社会についての認識を深め、興味・関心等に応じ将来の学問や職業の専門分野の基礎・基本の学習によって、個性の一層の伸長と自立をはかることが求められていること。」

（教育課程審議会　平成10年7月29日答申から）

さらにその改革の狙いを、栃木県教育委員会では次のように解説している。

「各学校が「ゆとり」の中で「特色ある教育」を展開し、生徒に豊かな人間性や基礎・基本を身に付けさせ、個性を生かし、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を培うことを基本的なねらいとしている。」

「総合的な学習の時間においては、各学校は地域や学校、生徒の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする。」

（平成12年度「県立学校における指導の指針」栃木県教育委員会）

総合的な学習の時間については後述するが、文部省が目指し、栃木県も実施に向けて準備している教育改革の方向は、前述の宮台氏の見解と対立するものではないだろう。大きな流れは自学自習と個人カリキュラムへ向っていることは確かなのである。

Ⅴ　考古学の成果を教材化する意味

(1)　教育現場へ

教育改革がこのような方向でなされようとする現代、考古学の成果の教材化にはどのような意味があり、またどのようなことを心掛けたら良いのだろうか。

早急な課題として、埋蔵文化財行政側では成果の活用と普及が問われるという事情がある。一方で学校側も、新教育課程の導入に伴い新しい教材の模索が必要である。また総合的な学習の時間に何を行うか頭を悩ませている方々も多いと思う。今考古学はこうした時流の中で、教育現場に大挙して乗り組むことも可能なのである。

過去、わが国の教育改革はすべて順調とはいかなかった。教育現場を大いに混乱させたものもあり、狙いは正しかったものの残念ながら定着しなかったものもある。今回の改革もその定着については危ぶむ声も強い。厳然として存在する受験体制と、学歴によるヒエラルキー社会に、おそらくは飲み込まれてしまうに違いないとの予測もある。

実際、例えばしかるべき解説を付けて土器や石器を見せたとしても、それは授業を補助したという以上のものではないだろう。私見では、大切なことは考古学的な作業や観察をとおして、考古学の発想を紹介することなのではないだろうか。

(2) 新教育過程と考古学

新教育課程の導入に伴い、考古学への期待は大きい。考古学の側でもこれに備えた実践について論じられる機会が多くなっている。これらの論点は、生徒の自主的な学習活動の重要性と、考古学がこれをいかにサポートできるかにあると思う。

「教科では時間を削られてしまったが、逆に今こそ選択社会科や総合的な学習の時間の中で考古学を教育に活かしていけるのではないか。教育現場と研究者、教育行政、文化財行政の互いの意思の疎通と協力ができれば。」

（阿倍泰久　1999「中学校における新学習指導要領と歴史教育」考古学研究46-3）

阿倍氏は、全国の中学生が自分で調べて学習をする姿を想起する。はたして現在の博物館・資料館・史跡・書籍・ホームページはこれに耐え得るのだろうかと指摘する。

「“授業や学校は学ぶきっかけを生徒に提供する手段である”という認識に立つべきではないだろうか。」

（吉村健　1999「日本史学習における博物館の活用」考古学研究46-3）

吉村氏も、総合的な学習の時間に博物館が積極的に利用されることを期待している。

総合的な学習の時間とは、新教育課程の「目玉」であり、その考え方を集約したような存在と言われる。各教科の垣根を越えて課題を設定し、生徒の自主的な学習活動を重視した授業となる予定である。卒業までの必修となっている。各学校では具体的に何をしようかと頭を悩ませている。

生徒は与えられたレールの上で学ぶのではなく、自分で課題を見いだして学習する。そこには小さな冒険もあるだろう。理想に近い展開となれば大いに成果が期待できるし、前節で述べた学校の変革期に対する一つの解答になるだろう。現実に受験詰め込み主義に限界を感じた高校で、モチベーションを高める方向に学習活動を切り替えたところ、かえって進学の達成率が向上したとの事例もある。

(3) 考古学の性格、特質

このように考古学には一つの期待が寄せられている。これは、考古学の次のような性格を時代が求めているからではないだろうか[4]。

考古学は遺構や遺物などの具体的事象から出発する。これを理解するために博物学的あるいは雑学的知識が要求される。法則にあてはめる以前に、個人の体験にもとづく判断が必要とな

る。分析にあたっては、他人が気付かなかった些細なことにいかに意味を見いだすかが問われ、叙述ではディテールにこだわりを持たなければ説得力がない。

こうした性格は開かれた門戸、その持ち合わせた資料や個人的な体験により、誰でも議論に参加できる自由さを持っている。高度な学識や方法論に裏打ちされた論考にはかなうべくもないが、一人一人が自分のディテールを持ち発言することが可能なのである。

また考古学は、前述した網野氏の引用からも想定できるように、根本問題への溯上の可能性をいつも抱いている。具体的には、生活文化史的視点からこれは何だという切り込みができるのである。社会のさまざまな枠組みが根本的に問い直されている現代、こうした視点に立つことの重要さは、ぜひとも次世代へ伝達しなければならないだろう。ディテールを説明できないような安直な解釈への警戒心とともに。

こうした考古学的発想は、現代では歴史のみならず文学や美術の分野、あるいはサブカルチャーの分析などでも広く用いられて流行している。個別事象の解釈をくり返すことにより、生徒は自分なりの思考パターンを学習する。やがてそれはパーソナルな分析法の確立につながり、現代社会の諸事象や自分の身に迫った問題を整理するのに役立つはずだ。考古学を題材に比較的得られやすい情報から、自分で考えて問題を見つけだし解決する学習プログラムを提供できないだろうか。

Ⅵ　おわりに

高度化・成熟化する社会に対応すべく教育改革の必要が叫ばれる現代。しかし多くの学校は旧態依然の体制が堅持されている。子ども達の中には、さまざまな形でこれを拒否する者もいる。これに対し古い価値観を再確認することにより解決を求める人々も、社会では大きな力を持っている。

こうした中で、考古学の成果を学校現場にどのように「普及」したらよいかについて考えることが、本稿のはじめの動機であった。それは単に出土品を見せればよいのかという関係者のとまどいであり、どのような方法がより効果的かという問いかけに発するものでもあった。そこで考古学の成果の教材化というプロセスの必要が生じたのである。

本稿を執筆するにあたって、教育上の技術的な問題よりもまず、考古学的な考え方をなんらかの形で今の教育現場に発信すべきであるという、個人的な意見を述べる方にシフトした。こうしてこのような形になった。この変更は、筆者の勤務校での日頃の思いがさせたのだと自分では考えている。

考古学の側でも「普及」に真剣に取り組むようになった。これには行政的な要請もあるだろうが、一つには成熟した考古学の役割として研究者の方々が意識するようになったのだろう。

中世考古学が網野氏らを困らせた頃、前述のようにそれは青年期の心理にも似ていた。今度は子ども達の「問題」を受け止める側に立ったと言えないだろうか。

社会や学校への「普及活動」が活発になると、研究の方向にも変化が生じることが予想される。人に説明しようとする努力と、予想外の生徒の反応に接した時、新しいアイデアが生まれるのではないだろうか。また教材化の前段階となる基礎研究も、今後充実していくものと予想される。考古学研究者以外にも発言できる論文が多く発表され、そうした面からも考古学の市民権はより強固なものとなるだろう。

本稿の概要は、平成12年5月19日の㈶とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターの研修会で発表の機会を賜りました。こうした機会を実現して下さった中山晋氏・津野仁氏、最近の動向についてご教示下さった仲山英樹氏・内山敏行氏、そして田代己佳氏・篠原祐一氏をはじめ編集委員の皆様に厚くお礼申し上げます。　(2000年8月31日)

註

(1) ㈶とちぎ生涯学習文化財団の前身

(2) ついで言うならば、発掘現場に仕事に来てくれた人々は、多くは子育ての途中であった。一緒に仕事をしながら話した内容は、保護者の本音であり別の視点から見た学校であった。例えば雨の日に高校生の子どもを学校へ車で送る。学校から見れば何と過保護なとなるが、親にとっては娘や息子との貴重な会話の時間となっていたと言う。筆者にはこれも貴重な体験であった。

(3) これについては、モラトリアムの長期化などの背景もあるだろう。一方希望してもなかなか正社員になれない勤労学生が多いことも事実である。

(4) 以下の内容は、考古学の方法論にもかかわることで、筆者などの手におえるものではない。しかし教育問題と考古学の係わりを取り上げた本稿の趣旨から、ぜひともと判断してあえて個人的な考えを述べた次第である。